

中・上級中国語学習をより効率化するための試み

立命館大学言語教育センター ビラール イリヤス
立命館大学経済学部 齋藤敏康

1. 概要

外国語教育教材開発は紙媒体の古典的な様式からマルチメディア様式に移り変わってきています。情報技術が凄まじい発展を遂げつつある今日では、ほとんどの教育機関でコンピュータを用いた語学教育を行っています。その背景には、CALL(Computer Assisted Language Learning)教育が大変有効であるという立証済みの結果があるからだと思います。CALL 教育システムを用いることによって、学習者の満足度および達成度が高まったという結果は、今では語種を問わず、語学教育現場に CALL 教育システムを導入している各教育機関で得られています。

各教育機関の CALL 教育システムの研究開発者および CALL 関係者の努力によって、さまざまな CALL 教材が立ち上がっています。中国語 CALL 教材の場合、今日各教育現場で活用されている教材の状況からみて、中国語初級学習者用 CALL 教材システムはほぼ出つくしていると言えます。ここで、我々は週 2 コマで一年間 30 週の授業で達成できるレベルを初級と言っていますが、具体的には、短文中心で、1000 から 1500 ぐらいの語彙と基本文型および基本的な文法・語法をマスターするレベルを指します。現況では、この初級レベルの CALL 学習教材はほぼ完成されていると言えます。そのため、ここでは中・上級中国語 CALL 教育システムの研究開発の議論をしたいと思います。つまり、中・上級中国語教育をどうすれば効率化・システム化できるか、そのために何が必要であるかということの問題にしつつ、現況の教育システムの改善方案に関する所見を述べることにします。ここでは、短文から複文等の複雑な文章への移行過程を、つまり漢字 3000 字前後を覚え、一定の長さの文書を速読して理解できるレベルを、中級と言います。そのためには、文法・語法および文型の基本事項・構造を使用言語として理解できるレベルが要求されます。さらに一歩進んで、さまざまな話題や各場面でのコミュニケーションに対応できる能力を中級から上級の範疇に入れます。上級は、専門テーマのプレゼンテーションや専門書の読解能力があることを目安とします。

ここでは、どのような教育システムを構築すれば教育の効率を上げることが出来るかということに焦点を当てます。そのため、まず中・上級中国語教育の特徴および CALL で改善すべきところを分析することにします。

2. 学習目標及び特徴

中・上級学習の目標は初級で取得した基本単語に留まらず、その語彙数を更に飛躍的に

増やすとともに、文法や語法事項、基本文型などの基本的な用法を熟知し、さらに複雑な文を構成する接続詞・補語構造などを使いこなすことに置きます。そのため、教材には単語の学習をはじめ各種の実用会話や各種構文が盛り込まれるべきです。単語学習では、品詞や訳はもちろん、常用関連表現およびその用例も提供すべきです。実用会話表現には、日常使用表現の各場面での会話をできるだけ詳細に分類・整理し、かつ解釈付きで提供すると学習しやすくなります。例えば、乗り物に使う表現を例にあげれば、バス、タクシー、地下鉄や電車、飛行機などの乗り物別の会話用語を別々に提供することが望ましいし、もし登場する表現に異なるところや注意すべきところがあれば解釈も付け加えるともっと効果的になると思われます。表現やパターンに関して検索機能を付け加えると、各種の構文やパターンの構造およびその使用例を簡単に見ることができます。

3 . CALL による一般授業の補完

上記のような、望ましい各種特徴は CALL システムを用いると簡単に教材システムに盛り込むことが出来ます。そのために、CALL を併用した一般授業がどのように補完されるのかを簡単に述べることにします。

まず、普通の教室授業は一般的に限られた時間内で行う一斉授業です。一斉授業では学習能力の差異や修得レベルの個人差を配慮しにくい上に、時間の制限も受けます。しかし CALL 教育システムを利用すればこのような制限からはほぼ完全に開放されます。

次に、一般のリスニング授業について言えば、たとえ LL 教室授業でも、再生して流すのみで、細かいコントロールは難しいですが、これに CALL システムを導入すると各自のペースで音節単位の聞き取り練習をすることも簡単になります。

また、一般授業での単語学習は読み、訳だけですが、CALL を導入すると関連用語、用例なども簡単に見ることができます。その定着度を自己テストして瞬時に把握することも出来ます。

語学教育の過程で、添削、採点、評価などは必要不可欠です。そしてこれもまた教授者にとって大量の時間が費される場所でもあります。特に、クラスサイズが大きければ大きいほど負担が問題となってきます。もし CALL 教育システムを利用すれば教授者がこのような煩重な労働から開放され、学習者が各自の不足点を瞬時に把握することができますので、各自の弱点や不足点の克服や補足に役立ちます。

最後に、普通一般授業では学習履歴が学習者自身によって、キチンと管理されていることはあまりないといえます。CALL の場合、そのような仕掛けを作っておけばいつでも、何処でも学習者の学習履歴を瞬時に参照することができます。これは、学習者が自分の弱点を克服するきっかけ作りにもなります。

4 . CALL 教育システムによる理想化の実現

以下、上記のいくつかについて実際の CALL 教材システムを実演することにします。